百花逍遥（当季雑詠作品）　倦鳥　選・評

天

七日粥飛天の母の声聴こゆ　西風

今年も好調なスタートを切った西風さんはまず、七日粥である。

七草なずな唐土の鳥が日本の土地に渡らぬさきに七草なずな・・・

六日の晩、俎板の上でこうはやしながら氏の母君も菜を刻まれることをされてたか。また七歳の子供が近隣七軒を回って七草粥を貰ってたべる風習も九州には残っていた。飛天の空とは本来、天女、天人が舞う空のことである。いま天女となられた母上は何を歌っておられるのか、そのお声は、西風さんのみには鮮やかに聴こえるのである。

お正月にふさわしい、美しい母恋の秀作となった。

宿酔いの閻魔のくれし初中り　弓人

「新年射会」なる前書き。前書きがなくともいわゆる「弓始め」の儀式の一場面であろうことは容易に想像がつく。しかもお正月らしい淑気に満ちたほのぼのとした気分であって、それはなんといっても「宿酔い」（二日酔い）の一語のもたらす余韻である。その主は弓人さんなのか閻魔様なのか。吟味を要するところであるが、閻魔とする方が面白かろう。閻魔大王も射手同様年末からの飲みすぎであって、いささかの酩酊状態。判定もおおまかで、「よし！命中の範囲内」。

心もうきうき、楽しい弓始めの情景が、誰が読んでも彷彿とするのである。

ムツゴロウ飛んで威をはる大干潟　まさ

「アガン魚ノオルトッテ、タマガッタバイ」。九州の人間でも有明海に生息するこの珍魚に接するとびっくり仰天である。干潟の泥中に棲み、体色は黒紫で白い斑点。下まぶたが発達していて、目を自由に開閉できるのは生活環境故の自然の摂理か。

縄張りに敵が侵入すると掲句のように高々とジャンプして示威行動に移る。それをうまく「威をはる」としたまささんの表現力に舌を巻くのである。

この愛すべき生き物を人間は佃煮にして食べてしまう。しかも彼らにとっては詐欺同然の竿のひっかけ釣で。きっと人類は罰があたって滅びるに違いないと確信する瞬間である。

地

ワグナー観て蕎麦の立ち食い冬の宵　満紀子

平成の現在、贅の限りを尽くす一句といえようか。

絢爛豪華な音の洪水がワグナーである。劇場と思えない宇宙の創造。「あんな世界があるなんて・・・」と唇を噛みつつ吐き出される劇場。とたんに忘れていた空腹感に襲われる。あつあつの立ち食いそばで取りあえずお腹を満たす冬の宵。大音楽家と蕎麦の対比。

父と子の呼吸（いき）の揃わぬ煤払い　しろう

父と子の間柄はまず「呼吸の揃わぬころからが大人の関係となる。最初おそわったちちの呼吸を見捨て、独自の呼吸を造り出す。そのころからイキの合うことはまずなくなるのである。つまり一人前の大人は呼吸が合わぬのが当たり前であってこれが　父と子の呼吸の合ひたる煤払い　では気色わるいことこの上ないのである。

三ヶ日猫に小判のごときかな　清龍

一見おかしな句である。「貴重なものを与えても本人にはその値打ちが分からないこと

の例え」と解されるのであるが、これは多分氏独特の「逆説」であろう。　（H）

初詣みくじをやめて団子買う　藤　則

「費用対効果」の問題であるがこれに欲望及び満足係数がどうからむかとなると、もう計算の外である。初みくじの大吉は精神的安定を与えてくれるが、手にする確立は低い。

子等離れ二人ですごす大晦日　慶　子

全国的にみてもかような家族の大晦日はまさに数えきれないほどあることであろう。その昔、自分達も両親に同じ思いを与えたのかもしれないと考えると感無量の大晦日である。

本年も三人だけの雑煮膳　信　貴

一夜明けると小家族で祝う雑煮膳である。家族とは不思議なもので、二人より始まりマックスとなりやがて・・・。どなたもこの現実から逃れようはない。

お雑煮の白味噌の味母の味　弓　人

源平合戦の紅白ではないが、白味噌は特に関西であろうか。今年は特別に弓人氏が腕をふるったか、白味噌仕立てのお雑煮は、首尾よく母上譲りの味を醸したということかしら。

ささやかな運買ふてをる酉の市　しろう

大熊手が売れたときの景気良い手拍子は気持良いものであるが、家庭用程度では手拍子は頂けない。せめてささやかな運試しをするつもりで熊手を求める酉の市である。

一つずつ正月仕舞ふ4日かな　和　代

いわれてみると確かにそうである。正月には。また来年までつかわぬものの何と多いことか。丁寧にすすいでぬぐい、名残惜しんで仕舞うのである。

あつあつのおでんの湯気に手をこすり　冬　草

寒の厳しい折のおでんはもちろん、ふうふう吹いていただくのだが、思わずその上に手をこすりながら、かざしていることがある。その感じがよく出た。

（スカイツリー特別賞）

かつて在原業平のさすらひし隅田川のほとりに「スカイツリー」なる大燭台の日に日にその雄姿を現しけるさまをある人詠みて

業平の燭台高し都鳥　善　啓

これぞ芭蕉の「不易流行」を地でいっているといった作品のありましたことを、句会席上不覚にも見落しておりました。「詞書」、「前書き」という非常手段があったのです。本作品もこの力を借りて大変メモリアルで立派な一句となることができました。絶好のタイミングでありまして特別賞といたします。（「詞書」、「前書に」については別項参照）

人

鐘ひとつ余韻わたりて去年今年　晶　子

たしかに去年から今年に余韻の及ぶ鐘もある。「わたりて」は「またがる」とした方が感じがでるようですね。「去年今年」が生きてきます。

除夜詣ではだか電球関東煮（かんとだき）　豊　嗣

除夜詣で／はだか電球／関東煮、は「三段切れ」といって嫌われます。除夜詣でのと「と」を補ってやると上五、中七が繋がり三段切れでなくなります。

橇に乗る孫の笑顔見る親の顔　河　童

当句会で「橇」の句は希少価値があります。「孫の笑顔と親の顔」位でポイントは十分ではありませんか？

水蓮鉢動ぜぬめだか寒の入り　やすし

この作品も「三段切れ」の弊があります。ここでも字余りになりますが「水蓮鉢の」と

「の」を補うことが必要です。小さな生命体の驚異的な強さ。

初御空この一点に連なれり　　雅　子

この広い初御空は世界中に続いている。その一点に連なってこの私も生きているのだという意志を強くするためには、主語を表に出します。〝初御空一点にわれ連なりて〟

枯れ枝も命をためて冬籠　　黄　雀

枯れ枝と思っても既に芽の萌芽があり、春の発芽を待って冬籠りをしているわけですから〝細枝の命育む冬籠り〟位に。

墨の香や一滴落とし初硯　　智　昭

一滴落として墨を磨り始める。ふくいくとした墨の香が部屋に広がり粛然とし新年の気分に染まってゆく。

（講師自句自解）

寒の星磨く仕事はなきものか　　倦　鳥

昭和三十五年の同志社イヴ映画祭が栄光館で催された折、その出し物はハリウッドのミュージカル映画『回転木馬』であった。主人公ビリィは恋人のために悪事に手を染めた挙句、命を失ってしまう。そのビリィの天国での仕事が〝星磨き〟であった。たくさんの星を磨きながら、地上の彼女の様子を眺める毎日である。

それ以来その仕事が気に入り、定年後はぜひともと考えていたのだが、第一の定年後はほかのことをしてしまった。星を磨く仕事は、ならば第二の定年後に・・と考えている。寒星はすこし辛いかもしれないが。

（今月の一語・・・詞書・前書き）

俳句の前に書かれる文言。和歌の場合の「題」「詞書」に当たる。単語一語であったり、短文であったり、かなりの長文であることもある。その句の作られた事情、背景等を示す。作者自身によるものが普通だが、作者以外で、その書の編集であったりすることもある。俳句は一句で独立したものだから、前書きに頼って、**それがなければ意味のわからないようなものはよろしくない。**

ただし、俳句は短いためやや複雑な状況は表現しつくせないことがあり、その場合に前書きが有効にはたらくこともある。また、積極的に前書きを句に映発させて、一句を超えた表現効果を意図したりもする。

（「現代俳句大事典」三省堂刊）

鳥兜の森　（兼題「雪」）　　冬草　選・評

しんしんと雪に音あり色もある　　晶　子

しんしんと降る雪は寒さが厳しいとかさかさという音を耳にすることができる。また、雪は白いというが、独特の色があることに気付かされた。

もてなしは雪の深さや湯治宿　　ま　さ

雪がふかいと湯治客にはあそびに行くところが少ない。非日常の雪の深さがこの宿の最高のもてなしだと納得しているのである。

初雪や想い出ばかり溶けてゆき　　清　龍

初雪にどか雪はまずない。うすい雪が溶けるのを見ると、年賀状の時期に受け取る訃報などで、友人、知人がが減り、たくさんの想い出も減ってゆく思いだ。それはあたかも雪に溶けてしまうかのようにはかない。

（あとがき）本会報も気の付く範囲ですこしづつ改善しています。ご希望をお聞かせ下さい。拙句集もお陰さまで好評で、「東京新聞」俳句欄（１・３０付）でも紹介がありました。